

238. 平成7年度滋賀県下における発掘調査の紹介(その2)

12. 二方向に造り出しの付く大型円墳

蒲生町木村 木村古墳群

県指定史跡である木村古墳群は、日野川中流域右岸に所在する県下最大級の中期古墳群である。調査は現存する天乞山古墳と久保田山古墳の史跡整備事業に先立ち平成4年度から実施しており、平成6・7年度にわたり久保田山古墳の調査を行った。本古墳は、これまでの調査で北側に造り出しの付く直径55mの円墳とされてきたが、今回の調査で北側の造り出しに対向する南側の位置にも造り出しが確認され、二方向に造り出しの付く円墳であることが明確となった。二方向に造り出しの付く類例は全国的にも少ない。各々の規模は円丘部の直径が57m、北側造り出しが幅13.4m、長さ8m、南側造り出しが幅19.5m、長さ12.5mを測る。墳丘は二段に築成されており、墳丘縁部全域および上段裾部の一部で葺石(山地産)が確認され、斜面全体に葺石が施こされていたと考えられる。周濠は幅14m、深さ1m前後で、外周ラインはほぼ円形を呈し、直径86m程である。墳頂部は大きく削平を受けて原状を留めておらず、したがって主体部も全壊したと判断された。ただし墳丘斜面に大型の石材が存することから石室構造をもつ主体部と推測できる。また、中段テ



久保田山古墳全景(南から)

ラスの外端で円筒埴輪列が3ヵ所確認されたことから、円丘部を一周するように樹立していたとみられる。また蓋型埴輪の立飾りなどの形象埴輪も少量出土しており、造り出し部を中心に配置されていたと考えられる。築造時期は埴輪の年代から5世紀前葉と考えられ、天乞山古墳に引き続いて築造されたようである。

本古墳群は平成9年に復原整備が完了し、本格的な古墳公園として開園する予定である。

(蒲生町教育委員会 田中 浩)

13. 「コ安元年」と墨書された土器

能登川町山路 上山神社遺跡

上山神社遺跡は能登川町のほぼ中央部にあたる大字山路の上山神社周辺に位置している。東側には平成4・5年度に発掘調査を実施した縄文時代後期から中世の集落跡である林・石田遺跡が隣接している。

今回の調査は、平成9年度に開館する予定の能登川町総合文化情報センターの建設に伴い平成6年度に実施した遺跡確認調査で遺跡の所在が確認された部分のうち道路部分(約1,500平方メートル)について発掘調査を実施した。

調査の結果弥生時代の河跡2条、平安時代末期から鎌倉時代の溝24条、井戸1基、柱穴などが検出された。

弥生時代後期の河跡は、調査区の西端部と東端に検出された。西端部のは自然木が多数出土したが、遺物はあまり出土しなかった。東端のものは上層からは黒色土器・土師皿などが混じって出土したが、中層の砂層からは弥生後期頃の土器などが出土した。

平安時代末から鎌倉時代の溝(濠)のうち調査区の中央から東端に屋敷地の区画溝と考えられる「L」字状の溝が長さ約55mにわたって検出された。幅は約3.5m、深さ約40cmある。埋土からは黒色土器や土師皿などの他に白磁の破片や土錘などが出土した。

この溝の南側(内側)に検出された溝の下層(別の遺構の可能性あり)からは「コ安元年」と墨書された常滑産のすり鉢の破片のほか黒色土器や土師皿など12世紀後半から13世紀代の遺物が出土した。また、箸や櫛、下駄などの木製品も出土した。

井戸は、「L」字状に検出された溝の南側から検出された。曲物を用いた径約60cmほどの小型の井戸である。黒色土器・土師皿などが出土した。



墨書土器(「コ安元年」)

今回の発掘調査で出土した「コ安元年」と墨書された土器は、その内容から仁安元年(1166)、承安元年(1171)のどちらかのもと考えられ、土器に年号が記されたものとしては非常にめずらしい例である。

(能登川町教育委員会 杉浦 隆文)

14. ベンガラ入りの壺を発見

能登川町佐野 とのにし 斗西遺跡

斗西遺跡は能登川町大字神郷・佐野にまたがって所在し、愛知川左岸の自然堤防上に立地する。これまでの過去の調査で弥生時代後期から古墳時代前期にかけての遺構・遺物が確認された。その中でも祭祀遺構・遺物の検出は特筆すべきものである。

今回の調査は資材置場造成に先立って平成7年4月から8月まで実施したもので、調査面積は1,454㎡である。

調査の結果、弥生時代後期から古墳時代前期にかけての竪穴住居跡22棟、奈良時代の掘立柱建物跡10棟、時期不明の溝跡1条などが耕土下20~30cmで検出された。22棟の竪穴住居跡の中で弥生時代後期の住居跡(SB-1 7.5m×9m)と、古墳時代前期の住居跡(SB-17 7.2m×7.2m)はいずれも床面において棒状の炭化物を検出し、しかも求心状にその炭化物が存在していたことから焼失住居と考えられる。また両遺構とも断面観察において焼土が確認された。SB-1の住居施設は壁溝、支柱穴、貯蔵穴が確認された。なお壁溝内には杭跡と思われる小穴が認められた。

一方、SB-17においても壁溝、支柱穴、貯蔵穴の住居施設が確認された。住居の壁に近い床面からは壁に沿ってベンガラが検出された。出土遺物としては床面において高杯のほぼ完形が15個体、小型丸底壺が6個体出土したが、甕は細片の確認のみにとどまった。小型丸底壺の一つからもベンガラが頸部まで入った状態で確認された。2ヵ所で検出されたベンガラはともに鉄を94%以上含有するという分析結果が得られた。

このように、古墳時代前期の住居内からベンガラが検出されたこと自体良好な資料になるとともに、隣接する祭祀関係遺構の新資料となる。

(能登川町教育委員会 西 邦和)



斗西7次 SB-17全景

15. 渡来人の住まい「切妻大壁造建物」を調査 愛知川町大字長野 なまず遺跡

なまず遺跡は、民間開発事業に伴い過去2次の発掘調査を実施し、その結果、縄文時代晩期から奈良時代に至る集落跡として知られる。また、奈良時代の遺跡は、「郡」と墨書された須恵器をはじめとする墨書土器、円面硯、転用硯などが数多く出土し注目される。今回の調査は、平成7年7月から9月まで実施し、竪穴住居や掘立柱建物とは異なる、渡来人の住居と考えられている「切妻大壁造建物」を検出した。

建物跡は、出土した土器や遺構の切り合い関係から、6世紀末に比定できる。幅50~80cm、深さ30cmの溝を布掘り状に掘削し、その規模は、一辺5.60mでほぼ正方形のプランをもつ。溝の一辺には、陸橋部を設ける。溝底には、径15~20cmの柱穴(間柱)があり、間柱は、先端を尖らせて打ち込んだ状況が観察される。建物の北側の陸橋部と南側の溝の中央部には、柱穴を配置し棟持柱を設置している。棟持柱間は5.60mで、桁行方向がN-30°-Wの南北棟である。

切妻大壁造建物は、近年、大津市北郊で多数検出される特異な建物で、志賀漢人に拘る住居と推定されている。また、6世紀末から7世紀初頭の比較的短い期間に限られている。本遺跡において、同時期の切妻大



切妻大壁造建物全景

壁造建物を検出したことは、渡来人集団の居住を想像でき、また、愛知郡内には、秦荘町金剛寺野古墳群の竪穴系横口式石室、愛知川町塚原古墳の木芯粘土槨墳、同町畑田廃寺の「秦」と記す習書文簡、文献史料にみる「依知秦」など、渡来人との関連が数多く見出すことができる。このように、今回検出した切妻大壁造建物は、依知秦氏と拘りのある渡来人集団が居住していたことを示す、初めての建物遺構として特筆される。

(愛知川町教育委員会 喜多 貞裕)

16. 湖東三山のひとつ金剛輪寺を発掘調査
 秦荘町松尾寺 金剛輪寺遺跡

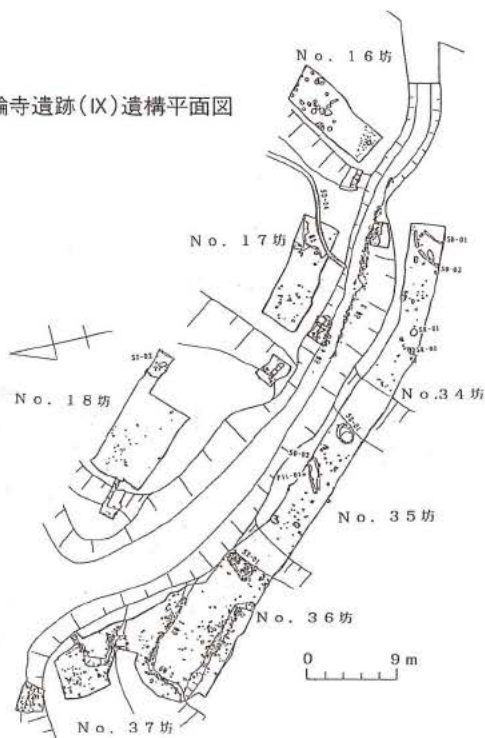
湖東三山のひとつである金剛輪寺は、天平13年(741)行基によって創建され、嘉祥年間(850年頃)円仁により中興され天台宗寺院として現在まで続いている。

この愛知郡秦荘町に所在する金剛輪寺遺跡を平成7年7月20日から9月13日にかけて秦荘町教育委員会が発掘調査した。金剛輪寺遺跡は、一山の東西南北4谷に坊を有していたと考えられるが、これまでの分布調査では現参道に沿った地域のみ坊跡を確認している。今回は、この中で金剛輪寺を流れる寺川の河川改修工事に伴い発掘調査を実施することとなった。

調査は、惣門から本堂のほぼ中間点にあたる坊跡を7ヵ所行なった。各坊跡は腐食土層を5~15cm掘り下げるとすぐ遺構面に達する。礎石の配置は明瞭でなく、後世の攪乱を受けていると考えられる。検出した遺構は、土拡・溝・井戸・石垣などである。SX01は、隅丸長方形を呈す石組み遺構と考えられる。長径3.4m短径1.6mを測り、深さ0.6mである。自然石を組み、埋土中にも多量の自然石が混っていた。出土遺物は、土師器片、陶器壺片、鉄釘などであり、現在のところ用

途は不明。石垣1・2は、犬走りである。石垣4を崩した時に裏込めはなかったものの、石の見えていなかった部分が焼けて黒くなっていることを確認した。これは、包含層や埋土中に混じる焼土や炭などが存在することも合わせて考えると、天正年間に信長の焼き討ちにあったことを示すものと推定される。さらに遺物では、鎌倉時代に比定される瓶子、小型仏花瓶等の瀬戸系の製品が多く搬入されている。遺物からみると、13世紀後葉前後と、17世紀前後の2時期に大きく分かれる。
 (秦荘町教育委員会 竹村 吉史)

金剛輪寺遺跡(IX)遺構平面図



17. 犬上郡多賀町木曾遺跡の調査
 多賀町木曾・中川原 木曾遺跡

木曾遺跡は、霊仙山に源を発し彦根市北部を流れる芹川と国道306号線の間位置する。調査は県営は場整備事業に伴うもので、平成6年度調査では渡来人に関わると考えられる2棟の大壁造建物が発見されている。今年度の調査面積は4,625㎡で、調査の結果、6世紀後半の横穴式石室・木棺墓、7世紀前半から8世紀前半頃の竪穴住居、7世紀以降の掘立柱建物、7世紀前半代に開削されたと考えられる大溝などが検出された。横穴式石室は既に削平されており、奥壁材一石と礎床が遺存していた。石室掘方は玄室部のみが長方形に検出され、羨道部については認められなかったことから、

湖東地域でみられる階段式石室の形態をとる石室であった可能性がある。竪穴住居は残存が良好なもので深さ約40cmを測る。カマドは竪穴の北壁ないしは東壁に造り付けられており、造り替えのあるものがみられる。また、カマドの右側に貯蔵穴が設けられている場合がある。柱穴は検出されておらず、床面を掘り込んで柱を建て上げる構造ではない。壁溝は細く浅いものが途切れ途切れに認められる程度であることから、防湿用に掘られた溝ではなく、壁板材を据え付ける為に掘られたもの、或いは壁板材の圧痕が検出されたものと考えられる。なお、須恵器円面硯が8世紀の竪穴住居の床面から出土している。7世紀前半に掘削されたと思われる大溝は幅2～3m、深さ1m以上を測り、底面は平坦に掘り上げられている。7世紀中頃に土石流によって半ばまで一気に埋没し、8世紀中頃にはほぼ埋まり尽くしたようである。本溝の開削時期と大壁造建物の年代観が近似することから、この大溝についても渡来人に関係した遺構である可能性がある。

(財滋賀県文化財保護協会 平井 美典)



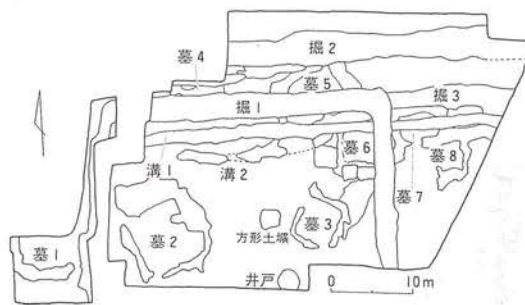
検出遺構

18. 中世の方形区画を検出
おおいぬい おおいぬい かまた
 長浜市大戌亥町 大戌亥・鴨田遺跡

今回調査を行った場所は本来周知の遺跡の範囲には含まれておらず、大戌亥遺跡・鴨田遺跡・下坂城跡に囲まれた遺跡の空白地とされていた。しかし、地元ではここを「本堂」と呼んでおり（正確な地名は大戌亥町字上鍋戸地先）、寺があったという言い伝えが今も残っている。そのため福祉施設建設に伴い対象面積4,088㎡に対して確認調査を行い、その結果をもとに約3,000㎡について本調査を実施した。

本調査は平成6年12月から約10ヵ月間にわたって行った。鎌倉時代末期頃の堀や、弥生時代中期から末期の方形周溝墓が検出され、土師皿や青磁器・弥生土器の甕などの出土品を得た。

中世の遺構の主なものとして、幅2～4m、深さ約



調査区概略図

1m程度の堀が3条（堀1～3）と、それとほぼ同時期に存在し大量の土師皿が一括投棄されていた溝（溝1）、方形土坑などがある。堀1はコの字状に巡っており、調査区南側の五井戸川を利用して方形の区画をつくっていたようだ。内側には土塁もあったようだが、建物跡は検出されていない。

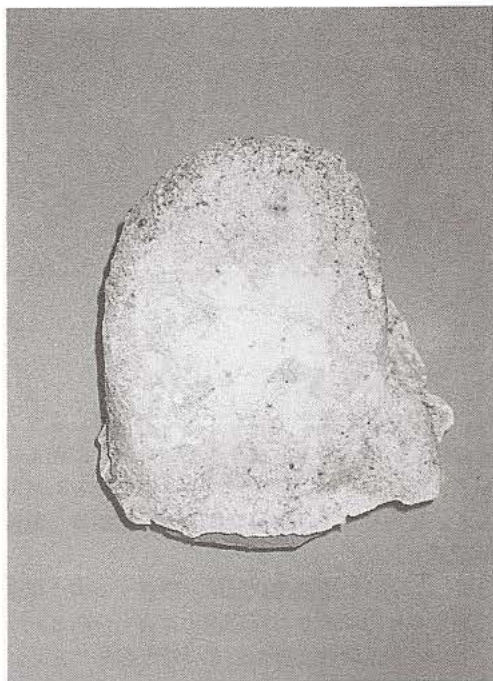
弥生時代の遺構としては方形周溝墓が8基（墓1～8）と、その共有周溝として使われていたと思われる溝（溝2）が1条検出されている。中・近世の遺構によって破壊されているところが多く全体の様子を把握するのは困難だが、後世の削平をあまり受けておらず底面から良好な状態で遺物が出土している。

調査地が下坂城跡に隣接していることから、今回検出された中世遺構は下坂氏に関連する何らかの施設であった可能性が強い。類例は今後の大戌亥町周辺の調査で確実に増えると予想されるので、この問題は徐々に明らかにされていくはずである。

(長浜市教育委員会 池崎 陽一)

19. 中世水田跡と国内最古級のウマ足跡
かだ こんこうじ
 長浜市加田町 金剛寺遺跡

金剛寺遺跡は、長浜市南部の加田町に位置する。弥生時代から鎌倉時代の複合遺跡であり、寺院跡の伝承も持つ。これまで、県文化財保護協会によって2回の調査が行われたが、市教委では今回が第1回目の調査となった。調査によって、確認された遺構面は2面であり、第1遺構面中世（13世紀中葉頃）と、第2遺構面古墳時代（6世紀初頭から中葉頃）である。第1遺構面からは東西に長い唐鋤の溝と、ヒト、ウシの足跡が検出されたことから、中世水田跡であると判断した。この水田跡は、唐鋤の溝が東西に長く、条里の方向に平行であることから、中世の長地型水田であることが考えられそうである。唐鋤溝は71本検出され、また足跡の他に成年男子と思われる左手跡も検出した。手は、大きく開いており、親指から子指まで19cmで、中指か



古墳時代ウマ足跡石膏型

ら掌が17cmであった。これまでの公式報告で、手の跡が検出されたものは奈良県広陵町の箸尾遺跡の13世紀の右手跡だけであり、大変貴重な成果となった。

第2遺構面からは、調査区を南北に走る河川跡と、河川跡に合流する溝が検出された。この河川跡の西岸と溝内より、多数のシカ、ウマ、ヒトの足跡が検出され、埋土中より6世紀後期頃の須恵器、土師器が出土したことから、足印が付けられた時期をその直後頃と判断した。特に古墳時代のウマ足跡は、これまで近畿地方では検出報告がされておらず、全国例から考えてみると、最古例が群馬県の浜川芦田貝戸遺跡検出の、6世紀初頭のもの、同県の子持・白井遺跡検出の、6世紀中頃のものがあり、全国的にも最古級に位置付けられることが考えられる。ウマの足跡検出により、渡来系氏族による、馬の養育と牧の存在がより濃厚となってきた。なお、この成果は報告書として刊行される。
(長浜市教育委員会 西原 雄大)

20. 中世の土間敷き建物跡を検出
長浜市勝町 経田寺遺跡

長浜市勝町に位置する経田寺遺跡は、行基が創建したという伝承のこる寺院跡として周知されている。

今回の調査は、長浜市勝土地区画整理事業に伴う発掘調査で、平成6年度の継続事業である。平成6年度の第1次遺構面の概略としては、掘立柱建物跡が4棟・土壇が30基・人工水路が24条・井戸が3基・土壇

墓が1基・塚墓が2基・道路が1本を検出した。遺物では、弥生式土器・灰釉陶器・土師器・陶器・輸入陶磁器(中国製の合子の蓋)・漆器椀(井戸)・古銭(土壇墓)・硯(土壇)・土錘・蛤刃磨製石斧・チャート剥片などが出土した。時期としては、14世紀中頃から15世紀初頭頃と考えられ、中世集落が形成されていた。

平成7年度の第2次遺構面では、13世紀末から14世紀中頃の土間敷き建物跡が1棟・掘立柱建物跡が1棟・井戸が7基・洗い場遺構が3基・人工水路が7条・柵列などを検出した。土間敷き建物跡では、規模が9.2m×6.3mの長方形で、土間部分(5.8m×6.2m)と板間部分(3.4m×6.3m)とに別れている。土間部分の断面を観察すると黒色粘質土が敷き詰められており、厚いところでは、8cm程あることが分かった。さらに、土間部分の西側では、柱穴があり、板間を確認した。おそらく東側から出入りをしていただと思われる。また、洗い場遺構は、3ヵ所確認され、全長5m前後で幅が2m前後、深度が30cm前後である。排水用の溝から引いているものや井戸からの水を蓄えられるようになっているものもあり、洗う物で使用する方法も違ったものと考えられる。

今回の調査で、寺院跡と考えられるものが検出されなかったが、土間敷き建物跡が薬師堂になるのかを今後、検討したい。
(長浜市教育委員会 伊藤 潔)



土間敷き建物跡

21. 縄文時代後期の埋蔵が15基出土
長浜市宮司町 宮司遺跡

宮司遺跡は長浜市宮司町に所在する。調査区は市道石田・宮司線を挟んで、南北2箇所にまたがる。両調査区とも上層から中世の集落跡が確認されたため、下層遺構確認のための断割りを行ったところ、10~50cmの遺物包含層が検出され、その下層で多数のピットとともに埋蔵*が出土した。とくに市道北側の調査区においては厳しい湧水と共に約1mの無遺物層が広がっていた。



埋甕出土状況(側面より)

埋甕はピット群の中に散在して出土し、一定の法則に基づいて埋設配置された様子はなかった。包含層と遺構面からは石器片や石皿・凹石などの実用品も何点か出土しているが、多数のピットが住居跡等に伴うものかどうか判断しがたい。配石遺構も確認されなかった。

埋甕の内容土中には石器片や3mm四方の骨片などが入っていたが、意図的なものか流入土に伴ったものかどうかは定かではない。土器底部付近の内容土に骨片が含まれているものもあったが、非常に脆く小さいため、どのような動物の骨かは分からない。

埋設されていた土器はいずれも器高30~40cm程度の深鉢で、口縁部や底部を欠いているものが多かった。埋設状態はほとんどが正位だが、横位のものが1点だけあった。これはほぼ完形を保っていたことから、土圧の影響によるものではなく、意図的な埋設状態と思われる。

出土位置や出土状況などから、これら埋甕の性格を判断しがたいため、今後の内容土の化学分析の結果などに期待したい。

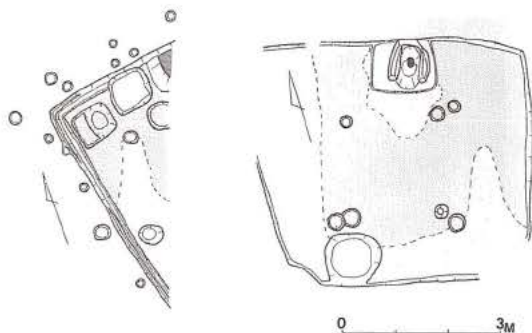
※「埋甕」という呼び方が適確かどうか考慮すべきではあるが、今回は一般的な土器埋設遺構の呼び方として用いた。(財滋賀県文化財保護協会 重田 勉)

22. 5世紀における拠点集落の調査
安曇川町田中 下五反田遺跡

下五反田遺跡は安曇川町の中央部、字田中に所在する。従来、知られることのなかった遺跡であったが、平成6年度の安曇川町教育委員会の発掘調査によって、その存在が確認されるようになったものである。

さて、今回の調査は県道改良工事に伴うもので、約2,700㎡を対象として実施した。調査の結果、3世紀から12世紀にかけての遺構・遺物が確認されたが、その中においても注目されるのが、5世紀代の成果である。

5世紀の遺構としては、8棟の竪穴住居が存在する。内2棟においてカマドが確認され、さらに2棟におい



竪穴住居

ては、その存在が推定できる状況にあった。カマドは、住居の床面と同一あるいはやや高いレベルに据えられており、これは古い段階のカマドの特徴とされるものである。遺物としては、初期須恵器、鍛冶滓、製塩土器が確認できた。

さて、こうした遺跡の状況は、隣接する南市東遺跡と共通するものであり、河道等によって分断されつつも、一つの居住範囲を形成していたと理解できる。そして、この居住範囲は、①他地域との交流を活発に行い、②最新の文化・技術の導入を達成する。③地域内においては群を抜く物資・技術力を持ち、④それらを地域内に流通させる核としての立場を保持する。という特徴に集約されるのである。

こうした特徴を示す遺跡群としては、栗東町高野・辻遺跡、安土町小中遺跡、長浜市大塚遺跡、高月町高月南遺跡などが指摘でき、いずれも5世紀代の拠点集落と考えられるものである。下五反田遺跡もそうした遺跡の一つであり、当時の社会構成上の中心としての評価を下す必要があるだろう。

(財滋賀県文化財保護協会 細川 修平)

《刊行図書の御案内》

- 1) 紀要8号
- 2) 中屋遺跡〔県営かんがい排水10-5〕
- 3) 岩屋古墳群試掘調査報告書
- 4) 北落古墳群Ⅰ〔ほ場整備21-4〕
- 5) 北落古墳群Ⅱ〔ほ場整備22-3〕
- 6) 尼子遺跡〔ほ場整備20-4〕
- 7) 滋賀文化財だより合本4 (No.151~No.200)
- 8) 近江の文化財教室合本3 (No.101~No.150)

お問い合わせは

〒520-21 滋賀県大津市瀬田南大萱町1732-2

財滋賀県文化財保護協会 Tel0775-48-9780